

町指定文化財(書跡)

くろさわ と き とうかいどうごじゅうさんづき うた

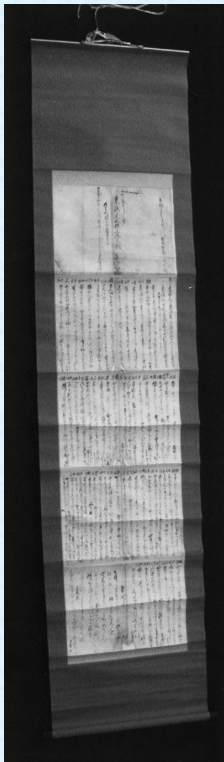
「黒澤止幾の東海道五十三次の歌」

指定年月日/昭和四十九年四月二〇日 所在地/城里町錫高野 管理・所有者/個人

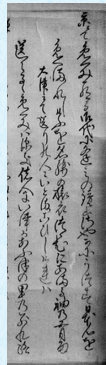
安政五(一八五七)年七月、不時登城し条約調印の非を責めた水戸藩九代藩主徳川斉昭は、幕府から「急度償」の処分を受けてしまいました。

翌安政六(一八五八)年二月二二日、止幾は斉昭の無実を朝廷に訴えるため、錫高野を立ち、単身京都を目指しました。草津から雪深い洪峠を越え、松本、妻籠を経て、三月二五日の夕方京都に到着しました。

止幾は、自作の長歌(幕府の外交政策の誤りや、斉昭の無実を訴える内容を朝廷に献上しようとした)が、役人に囚われてしまいました。厳しい取り調べの末、五月一五日には唐丸籠に乗せられて東海道を下り、江戸に護送されました。



▶黒澤止幾の東海道五十三次の歌



▶「東海道五十三次の歌」の一部 (京都・大津)

解説文/町文化財保護審議会会長 小山映一
問合せ 教育委員会事務局
☎029-288-3135

た。止幾、五四歳のことです。

町指定文化財「黒澤止幾の東海道五十三次の歌」は、このときに詠まれたもので、「送らるる恵みは深き諸人にいつかお津のさとの別れ路」(大津宿)のように、各歌には宿名が読み込まれています。

止幾は、一〇月二七日に中追放(江戸十里四方と山城国・常陸国への立ち入り禁止)の刑を申し渡されましたが、一月六日には錫高野に戻っています。

俳句

幾度も飛び立つ 仕種梅雨の蝶
今瀬 多代美
爽やかや島影よぎる窓の外
瀬谷 博子
だらだらと出してみたりの更衣
中野 千賀子
青梅雨や小町水車のまはりゐて
綿引 英子
雉子速し藪より出でて藪に入る
飯田 勇一
折り紙で水芭蕉折り青葉窓
竹内 幸子

文芸しろさと

短歌

詰将棋の藤井七段十七歳に
感動しつつテレビに観入る
杉山 みちこ
残雪の岩手山背に小岩井の
牧場に孫のまばゆひ笑顔
大森 久子
今宵また短歌詠む気分出で
たり生きゐる証と思ひて眠る
佐川 あや
つなぎたる幼児の手の柔らかさ
汚れしものに未だ触れざれば
渡辺 千紗子
三十年前友と行きたる福島
の三春滝桜は今年も美しや
所 美恵子

虚空いまうすむらさきの花標
田口 勝元

草刈し広さに遊ぶ風のあり
仲田 まちゑ
真つ新な令和の茅の輪くぐりけり
寺門 孝子



川柳

見舞い客増えて病状気にかかり
富田 多蔵
行楽日家族の笑顔パパ地獄
車田 綾子
山の中俺も唸るぜ草刈機
飯村 孝一
卒寿過ぎまだ行けるぞと胸を張り
川原 清

あぎやかにすぐあの頃を思
い出す古き短歌は人生の春
山形 式妙
幼き日つばな摘みたる片山
の森は消え失せ雲流れゆく
島 愛子
筑波嶺がくつきり浮かぶ五
月空半月白く中天にあり
信田 育子

歓声に対抗リレースタート
す六年生の女孫はアンカー
富田 佐智子
白雲のふたつみつつを遊ばせ
てポピーの果てに筑波山見ゆ
萩谷 登喜子
湯船には菖蒲いっばい浮かば
せてやわらかい香に至福の時を
菌部 光子

母の日に今年も届く紫陽花
は茶の間に飾り子宝うれし
富田 欽子
新田に我が世の蛙染み渡る
豊年の声夕日輝く
矢次 洋平

【お詫びと訂正】

5月号「城里町の文化財さんぽ」の一部に次のとおり誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

正 鳥石楠船命
誤 鳥石楠舟命